

原始



景光掘発棺葬

地理的環境

に、この大規模縮切干拓計画は、いずれ将来実現の可能性が予想される。この計画実現の暁には、有明海は一四・六万ヘクタールの淡水湖と化し、潮汐干満は消失して満潮に因る陸水の氾濫や高潮災害も消滅するわけであるが、自然のバランスの一大変革であるが故に、自然的には不測の変動も危惧され、また水産業の問題^③があるので、予め綿密な研究調査と対応策の検討が肝要である。

○主な参考文献

『佐賀県史』

『疏導要書』南部長恒

『公害の現況と対策』佐賀県

注

① 『筑後川下流平野の開発』米倉二郎

② なお内水域は観光、養魚に利用し、堰堤は別府、阿蘇、熊本、雲仙、長崎を結ぶ九州横断の産業観光道路とする構想である。

③ 現在世界的に実現しつつある二百海里の経済水域設定の進行により沿岸漁業の重要性が急騰したため、「大規模縮切干拓」はもとより、従来の「築出干拓」も大きな問題となってきた。しかし一方、わが国の人口増加に対する農地の漸減と主食自給の立場上、干拓問題は政治、経済、社会的に重要な課題であると言わねばならない。

概 説

地球上に人類が出現したのは、数十万年前の洪積世の時代であったといわれている。この人類が地球上のどこに現れ、地球上の各地へどのように移動していったかということは、現在においても定説がなく明らかでない。彼らは、主として粗製の石器のみを使用し、金属器はいうまでもなく、石器の製作や使用も知らなかったのだ、その時代を旧石器時代と呼んでいるが、生活の実態については明らかでない点が多い。

日本列島に人類が住みついた時期も明らかでないが、遅くとも数万年から十数万年前の洪積世の時代であって、旧石器時代に属し、日本列島がまだ大陸と地続きであったところである。まだ石器を製作し使用することを知らなかった時代であるので無石器時代とか、石器を使用するようになった以前の時代という意味で先石器時代などとも呼ばれている。また、わが国で最初に製作され使用された石器が縄文式石器と呼ばれているので、この縄文式石器を使った時代よりも以前という意味で、プレ縄文時代あるいは先縄文時代ともいわれている。

この先石器時代の遺跡は、本県内からもいくらか発見されているが、遺跡は山頂から山麓にかけて分布している、生活の基盤が鳥獣や果実などの自然物採集に依存していたことを物語っている。しかし、この先土

器遺跡からは石器のみが発見されているにすぎないので、生活の実態などについては明らかでなく、今後の調査研究にまつべき点が多い。

土器の製作と使用が開始される縄文時代は、沖積世に属し、一般に新石器時代とも呼ばれていて、縄文時代の名称は土器形式に基づいたものである。この縄文時代の遺跡は、早期の押型文土器や前期初頭の条痕文土器などを出土する遺跡を始め、各時期のものが県内の各地から発見されていて、佐賀市内においてもその遺跡の分布が見られる。

この縄文時代の遺跡で注目される点は、鎮西町の赤松海岸遺跡や唐津市の西唐津海底遺跡または伊万里市黒川町の金剛島遺跡のように、海岸地帯に分布する遺跡と、西有田町の盗人岩洞穴や鹿島市音成の儀助平洞穴などのように、海岸線から相当離れた山腹に位置するものや、あるいは佐賀市金立町の権現原遺跡のように山麓に分布するものなどがあって、山丘から海岸までその生活の場が著しく拡大されていることであろう。

縄文時代人は、洞穴または竪穴式住居に住み、狩猟・漁労または果実の採集などに依存して生活を営んでいるが、縄文時代中期以降になると、採集した果実などを貯蔵するというも行われるようになった。金属器の使用は始まっているが、石器なども機能的に分化し、土器の製作と使用が始まって、漸進的ではあるが生活文化が相当に進化したことを物語っている。

縄文時代に続く時代を、土器形式に基づいて弥生時代と呼んでいる。この弥生時代の大きな特色は、農耕の技術と鉄器・銅器などの金属器がわが国に伝来したことであって、生活や文化あるいは社会に大きな変化をもたらすに至った。

弥生時代の遺跡は、山麓地帯から平地地帯にわたって広範に分布が見られ、水田耕作に便利な低地帯へ生活の場が移り、農耕を基盤とする生活が確立したことを物語っている。土器は機能的な分化と類型化が顕著となり、さらに大型の甕棺も製作され、土器の製作技術は著しく進んだ。石器も狩猟具や農具としてなお多方面に使用されているが、機能的には形式分化がいつそう進み、磨製石器が普遍化して製作技法も進歩したことを物語っている。

住居は縄文時代からの竪穴式住居を踏襲しているが、食生活の変化に伴い炊飯容器・食器・食物貯蔵容器などにも著しい変化が現れてきた。しかし、最も注目されることは、生活協同体的な農耕集落の発生であり、また、富の蓄積等の差に基づいて集落内に身分の差を生じ、原始的階級社会の発生をうながしたことであり、う。そして、集落間の連合による原始的部族国家が発生し、それを統率する首長の発生をみるに至った。

中国の古書に、「分かれて百余国」となるとわが国のことを伝えているのは、農耕集落を基盤として発生した原始的部族国家が、日本列島の諸処に分立していた当時のわが国の実態を伝えているものである。これらの小国家の首長層の中には、先進国である中国と通交して、先進文化を摂取するものもあった。弥生時代の甕棺墓などから大陸伝来の青銅器その他が発見されるのは、当時中国と通交があった事実を物語るものであり、一面においては大陸伝来の品を権威の象徴として保有する首長層の存在を暗示しているものであると考えられる。

一応安定した弥生時代の原始的農耕社会は、その後期を迎えると均衡がくずれ、部族国家間に離合集散が繰り返された。『魏志倭人伝』に、女王卑弥呼が君臨する邪馬台国のもとに三〇か国余りが統合され、しだ

いに国土統一の方向へ進みつつあることを記しているのであるが、「卑弥呼が死すと再び相誅殺す」とあるのは、統一国家出現前における複雑な社会の動きを伝えているものであると考えられ、来るべき古代国家出現の前鐘であったとみることが出来る。

一 原始社会の発生

(一) 先土器時代の社会と文化

数万年から十数万年前の洪積世の時代に、人類が日本列島に住みついたと考えられている。この時代をわが国では一般に先土器時代と呼んでいるが、この時代は人口が少なく、また、人口の増加率も極めて緩慢であったうえに、自然の恵みは豊かで、食料となる草木の果実や鳥獣・魚介類も豊富であったと考えられ、人々は狩猟・漁労・採集の自然に依存する生活を送っていた。土器を作り容器として使用することを知らず、石器を使用していたが、石器も簡単な加工が施された打製の粗製石器に限られていて、縄文時代における狩猟用具として普遍的な石鏃や石匙などもまだ使用されていなかった。また、石器のほかに、あまり加工の施されていない木器も使用されていたのではないかと考えられるが、木製の遺物はまだ発見されていない。

県内における先土器時代の遺跡としては、杵島郡大町町の鬼の鼻山遺跡とその北山麓に当る多久市多久町の三年山遺跡を中心とする一帯の尖頭器(ポイント)文化、小城郡三日月町の老松山遺跡、伊万里市二里町の平沢良遺跡などの腰岳周辺の石刃(ブレイド)文化が主なものである。これらの遺跡の中、鬼の鼻山や三